Jean-Luc Juvet

ジャン-リュック ジュヴェ
(ニコン精機設計部)

スイスと日本の違いを楽しんでいます

興味ある光学技術

Q——まず、現在のお仕事からお聞かせ下さい。

Juvet——現在、私は(株)ニコンの精機設計部に所属して、半導体製造装置の測定技術の研究を行っています。最初の研究テーマは、ステッパの新しいアライメント技術に関する研究でした。今は、超LSIのパターン幅をレーザを用いて測定する技術について研究しています。私は光学技術に興味を持っていますので、これらの研究を通じて、私の技術レベルを向上したいと思っています。

Q——光学技術に興味をもたれたのはどうしてですか。

Juvet——私は、初めに、スイスのニューシャテル州立工科学校(Neuchâtel State Engineering School)でエレクトロニクスを勉強し、スイスの電電公社であるPTTに入社しました。その後、もっと勉強したくなり、ローザンヌ工科大学(Swiss Federal Institute of Technology in Lausanne)に入学し、“マイクロテクニクス”を学びました。この“マイクロテクニクス”は比較的新し

い学問分野で、日本の「精密工学」に相当すると考えられ、機械工学、電子工学、光学などの広い範囲の技術を融合したものです。

この時の卒業論文で光学技術に関する研究を行いました。エレクトロニクスは専門が分化していますが、光学は様々な技術に関連していて、私にとってはとても興味を持てる技術でした。

スイスと異なる日本の企業

Q——日本にいらしたのはどうしてですか。

Juvet——二番目の大学を卒業した後、外国へ行ってみたくなり、いくつかの可能性を探してみました。そして、スイス工学アカデミーが、日本への奨学留学生を募集していることを知り応募しました。そういうわけで、比較的容易に日本に来ることができました。

Q——日本の企業に入られて、まず最初に、どんなことを感じましたか。

Juvet——科学者や技術者は日本でもスイスでも、実験したり文献を読んだりして、同じ内容の仕事を行っています。しかし、日本とスイスでは会社の組織に大きな相

違があります。例えば、日本の会社では頻繁に「打ち合せ」というミーティングが行われ、グループで仕事を進めています。ヨーロッパでは仕事は一人で行い、個人は独立しています。しかし、最近では、スイスでもグループで仕事を進めることを試み始めています。
Q——どちらのやり方が好ましいと思いますか。

Juvet——私は日本のやり方の方が好ましいと思います。なぜなら、自分と同じ部門だけでなく、生産、営業という各部門の人たちと話ができ、それによって、よくコミュニケーションできるからです。スイスでは階級意識が強いので、組織は一本の直線のようになっていて必要な情報が伝わるのには時間がかかってしまいます。

Q——そのほかに、気のついたことはありますか。

Juvet——まず、日本では新入社員の入社時期が4月に決まっています。特別の訓練を受けてから職場に配属されることに気がつきました。スイスでは、このような入社時期というのはありません。学生はそれぞれ異なった時期に学校を卒業して企業にはいつでも入社できます。卒業後、好きなだけバケーションを取ることもできます。そして、普通は入社しても特別なトレーニングコースはありません。

また、オフィスが大きく異なることにも気がつきました。日本では、みんな大きな部屋にいて仕事をしていますね。私がスイスのPTTにいた時には1部屋に二人しかいませんでした。

そして、最も大きな相違は、一般的には日本のような終身雇用ではないことです。私は、PTTに2年間勤務した後退社しました。これは普通のことです。一般に、大

学を卒業してから10年くらいは、様々な異なった体験をするために2,3回転職します。そして、だいたい35歳くらいになると一つの会社に落ち着きます。

Q——日本とスイスでは、あらゆる点で相違があるのがわかりましたが、逆に類似している部分というのがありますか。

Juvet——これは、しばしば質問されますが、いつもこのように答えています。すなわち、物理学の法則と市場原理を除いては文化的な共通点はありません。もちろん、これはジョークですが。(笑)

コミュニケーションが重要

Q——この2,3年、日本と欧米の間で貿易摩擦、技術摩擦が問題になってきました。スイスからみて、この点についてどう感じましたか。

Juvet——「摩擦」という言葉を聞くと、私はスイスと日本の時計産業の例を思い出します。昔は、日本の人々はスイスから時計技術を学びました。そして、約10年前には、日本の時計産業はスイスよりも強くなりました。スイスでは多くの人々がこれを快く思いません。その意味で、この分野にも摩擦があったと思います。

Q——たぶん、それは日本のメーカがクォーツ時計の開発に成功したからではないでしょうか。

Juvet——そうです。しかし、これはその問題だけではありません。決定的なのは、スイスの時計メーカはマネジメントの面で多くの過ちを犯しました。そのような産業が衰えていくのは当然のことです。今では、スイスの時計産業は再び強くなり、もはや問題はなくなりました。

Q——私たちは、そのような摩擦は望んでいませんし、諸外国と良好な関係を保ちたいと思っています

す。特に、技術の分野では必要です。そのために重要なのは、日本の国際化、外国とのコミュニケーション、技術交流などであるといわれていますが、これらに関して、ご意見をお持ちですか。

Juvet——じつは、日本に来る前は、私は、すべてではないにしろ、日本のほとんどの科学者、技術者は英語を話せると思っていました。しかしこれは違っていたため、日本に着いてからちょっと失望しました。私は日本語を勉強していますから、簡単なことならコミュニケーションできますが、複雑なことになると不十分です。一度、四国へ旅行したときに、身振りや絵でコミュニケーションしようと試みましたがとても困難でした。多くの日本人は無口で、動きがなく、体やスケッチで説明するセンスが無いように見えます。

Q——それは、あなたの前にいくとあがってしまうからではないですか。

Juvet——多分、そうなのでしょう。もう一つ気になるのは、子供たちのことです。子供たちが私たちを見ると、とても恐がります。それは、きっと、初めての経験だからでしょうが、徐々に慣れるようにするとよいと思います。これも一つの国際化だと思います。それから、駅の案内などは、ローマ字の表示が必要だと思います。

Q——ジュヴェさんは日本の企業で研究を行っています。これも、一つのコミュニケーション、技術交流の方法かと思いますが、この点に関してはいかがですか。

Juvet——もちろん、交流することはよいことです。私はヨーロッパやアメリカの人々と日本の大学、企業の間で技術者の交流をより多く行うことがよいと思います。もうすぐ、私の友人二人が、

日本の電気メーカで研修のため来日する予定です。これはよい協調だと思います。しかし、現状ではスイスには、きわめて少ない日本の科学者、技術者しかいません。

Q——日本側の技術者、科学者の受入れは十分ではないと言われていますが、あなたのような技術者をもっと多く受け入れるには、どうすればよいのでしょうか。

Juvet——それは、日本の企業のやり方にかかっています。もし、多くの人々を受け入れたいのなら、情報の提供が重要です。ヨーロッパでは、各国の企業が他国の留学生を募集するのは、一般的に行われています。日本の企業も、スイスの大学の広報や求人紙に魅力的な広告を出すことができると思います。スイスの大多数の人々は、日本へ留学することが可能とは思っていませんから。

Q——最後に、日本での生活はいかがですか。十分楽しんでいらっしゃいますか。

Juvet——はい、もちろん、スイスとは非常に異なっているので様々な発見があり、それを楽しんでいます。

Q——どうもありがとうございます。3月までのご滞在と伺っておりますが、ご研究の成果が上がるよう願っております。

略歴 1960年スイス、ニューシャテル(Neuchatel)市生まれ Neuchatel State Engineering School 卒業後、PTT (Post, Telephone and Telegraph) に入社。その後、Swiss Federal Institute of Technology in Lausanne 卒業。

専門分野は、エレクトロニクス(通信技術)、マイクロテクニクス(光学)。1988年3月来日、(株)ニコンで研修中。

(文責・木村景一)